

編者はしがき

本巻は、「宗教戯曲篇」の最終巻であり、前巻の「釈迦と維摩詰」の続きと「月愛三昧」が収められている。

「釈迦と維摩詰」は、昭和十年十二月七日、八日の二日間にわたって早稲田大学の大隈講堂で上演された。出演者は当時の「生命の實相」の発行元であった光明思想普及会の社員達であった。

この演劇をご覧になった谷口雅春先生は次のような感想を述べられた。

「あの脚本は、随分深遠な仏教の教へを取つてあるために仏教の神髓を伝へたいとい

ふ気持が、本当に純粹に、脚本として完全な、演出に便利なものにあの作をしてゐないといふことは作者としても知つてゐるのです。殊に第一幕の長い説教の連続みたいなのは、動作もなくなかなか演出に難かしかつたであらうと思ひます。あの第一幕だけをこの前に軍人会館(編注・九段会館)でやりました時、あの時はまだ第一場だけ書いてゐて次が書いてなかつたのですが、舞台面を見ると、どうも釈迦の弟子の坊主ばかりが沢山頭を並べて動きのない説教の集まりの芝居はともやりにくさうであつたので、第二場には一つ美しい舞台を拵へたいといふ風な気持が動きまして、あの第二幕を書いたのです。(中略)

第二幕の第二場は例の維摩の病床を見舞ふ能力があるかどうかといふ釈迦と弟子との問答になつてゐるので、そのためにやはり単調な場面はやむを得ない。あれは「維摩経」そのままを芝居にしてゐるのだからどうも仕方がない」(『生長の家三拾年史』

一七三頁)

「釈迦と維摩詰」は「維摩経」に沿つた筋立てで、その主人公・維摩詰は古代インド

の在家の富豪で釈迦に並ぶほどの覚者であると言われていている人物である。その維摩詰と釈迦の十大弟子と言われる高弟たちとの問答が繰り広げられる。

釈迦は維摩詰が病床に伏せていると聞き、弟子達に病氣見舞いに行くように指示するが、弟子達のそれぞれが維摩詰にやり込められた経験があり、恐れ多くて病氣見舞いの任に堪えぬと辞退する。

弟子の一人・優波離は、若い男女の密会に遭遇したとき、人間の肉体は美しく見えてもその中味は醜いことを説いて、「煩惱を離れるように」と戒めた。その場に維摩詰が居合わせ、「煩惱は本来無い、良き夫婦となってこの世に浄土を作れ」と言い、二人の恋人同士の仲好く歩んで行く姿を見送って、「あの姿が浄土である、あの姿がみ仏である、そのまま、みんな救われている。光明一元の世界だ、仏のほかにもない、みんな救われている」と語り、その維摩詰の言葉で智慧の眼が開かれましたと優波離は釈迦に報告した。

また、釈迦は弟子の羅睺羅にも維摩詰の病氣見舞いを促す。しかし、羅睺羅も辞退する。あるとき、羅睺羅が聴衆に出家の功徳を説いていたとき、維摩詰がやってきて、「利益なく功徳なきが出家である。こういう利益や功徳があるから出家するというのは見当ちがいでである。利益や功徳を求める心の浅間しさを捨てるのが出家である。受くべき利益も本来なければ、利益を受ける我も本来ないことを知って、ただ真如大生命の催しのままに、無相の相を生きるのが本当の出家である。法衣をまとうて袖の中で布施利益の大小を計えているが如きは出家ではない。だから、在家の中に却って出家があり、出家の中に却って在家がある」（一四頁）と説いた。

さらに釈迦は阿難に振り向ける。阿難は釈迦の体調を気遣って牛乳を托鉢しているときに、維摩詰にやり込められる。

「阿難、馬鹿なことをいうな。如来の身は金剛身である。すべての業障、すべての惑障、悉く断じ尽したのが如来である。諸惑悉く断じ尽した如来の金剛身が病氣をするといふことがあるはずがない。すべての天人、すべての菩薩すべての修行者に如来いま病み給うなどと、迷いを深める言葉を申してはならぬ」（一六頁）

このように次々と辞退する弟子達を前に、釈迦は最後に文殊菩薩もんじゅぼさつを呼んで病氣見舞いを要請し、文殊菩薩は受けて維摩詰の病氣見舞いに出かける。そこで維摩詰と文殊菩薩の深遠な真理の問答が行われる。

悟った維摩詰ほどの覚者がなぜ病氣をするかと文殊菩薩は問う。維摩詰答えて曰く、「人々迷うているから病氣がある。無いものをアルアルと思うのが既に病氣、その無いものを積み重ねて、それに執着しよくしやくするのがまた更に病氣。病氣というのは心にある。執着が病氣だ。まだ形が出なくとも執着している者は既に病氣だ。わが身体は鏡、衆生の心の病をわしの身体に振替えて見せたのだ」(三九頁)

谷口雅春先生には多くの仏教解説書があるが、すべて「唯神実相論」による仏教解説であり、「釈迦と維摩詰」もその次の「月愛三昧」も戯曲という文学形式を取った仏教解釈である。

本篇の最後の戯曲「月愛三昧」は、動きの少ない「釈迦と維摩詰」と異なり、動きの多いインド・羅闍祇国の宮廷内の愛憎劇である。

羅闍祇国の王子である阿闍世太子が父親である国王への不信感から、両親を幽閉し死に追いやり、自らも病に冒され、救いを釈迦に求めて昇天するというストーリーである。

真理の書であり、文学作品でもある本篇の戯曲を味読して頂ければ幸いである。

令和四年八月吉日

谷口雅春著作編纂委員会